前立腺結核の経過について

東京通信病院泌尿器科
(部長: 土屋文雄博士)

豊 田 泰
三 浦 枡 也

ON THE CLINICAL COURSE OF TUBERCULOSIS OF THE PROSTATE

Yasushi Toyoda and Masuya Miura

From the Department of Urology, Tokyo Teishin Hospital, Tokyo

(Director: Dr. Fumio Tsuchiya)

We have observed the course of tuberculosis of the prostate in 95 cases on palpation, for one to 15 years. These cases had complication of tuberculosis of the urinary tract and mostly received chemotherapies for 4 to 5 years. Among 95 cases, aggravation was seen in only one. Among 36 cases that were observed for more than 3 years, cure was 30.5%, improvement in 50.0% and unchanged in 19.4%. Figure 1-3 show some examples. The conventional concept that tuberculosis of the prostate cannot be completely healed should be discarded.

まえがき

前立腺結核は極めて慢性の経過をとる疾患で、多くの場合、尿路結核のかげにかくれてあまり注目を浴びていない。化学療法も、前立腺結核に対しては効果を期待できないといわれている¹⁾²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾。往時は、前立腺結核から、粟粒結核を発することもあり、また、膿瘍を形成して瘻孔をつくる場合もあつた。近年こうした症例を見な

いのは、やはり化学療法の影響と思われる。前立腺結核に対する根治的手術療法も発表⁶⁾⁷⁾⁸⁾⁹⁾はされたが、普及していない。化学療法に期待はできないにしろ、少くともその悪化は防止し得ると、暗黙のうちに容認されているのであろう。しかし、不思議なことに、前立腺結核が長年月の間に、どのような経過をたどるかということは報告されていない。われわれは、最近15年間における自

第1表 自験例の初診年とその観察年数

	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15年	計
1951	14	3	4	6												2	29
1952	10	5	2	2	2	1	1								1		24
1953	8	4	1	1		2			2				1				19
1954	13	3	1	1													18
1955	6	2	1						2								11
1956		2	4	1						1							8
1957	1	4	1		3	1		2									12
1958	3	1	2														6
1959	3	2	2	1	1	1											10
1960	1			1	1												3
1961	4																4
1962	2		2	1													5
1963			1														1
1964		2															2
1965	1																1
計	66	28	21	14	7	5	1	2	4	1		1		1	2		153

第2表 経過を観察した95例における観察年数とその転帰

経過年数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	計
治癒		1	7	2	2	2	1	1	1	1					1		19
改善	4	8	6	6	4	3		1	2					1	1		36
不変	2	20	8	4	2			1									39
悪化	1																1

驗例から、この点を調査してみた。

自験症例とその経過

1951年から1965年までの15年間に、東京通信病院泌尿器科で取扱つた前立腺結核の症例は 153例で、これは同年間の男子外来患者16,085例の0.94%に当る。

第1表は、153例の初診年と観察年数を表示したものである。153例中、尿路結核と合併していないものは1例に過ぎないから、尿路結核の減少に伴つて前立腺結核も急激に減少したことが、年次小計をみるとよくわかる。

観察期間は15年までで、3年以上の観察は38例、全体の24.8%を占める。

第2表は、触診上から見た前立腺結核の転帰である。触診所見には、診察医の主観が加わるが、ほぼその傾向はうかがえよう。治癒とは、前立腺が正常所見となつたもの、或いは多少萎縮を来しても硬結のなくなつたものを指す。改善は、病巣の出没はあつても、前立腺が全体として所見の改善を示した例である。1年未満の例で観察をつづけなかつた54例、手術した4例は除外した。結

局、対象となつたのは95例である。

化学療法は、尿路結核を主目標に施行したもので、SM (ストレプトマイシン)、INH、PAS、Tb₁ などを使用し、多くは SM、INH、PAS の三者を併用している。使用量と期間は、SMをはじめ 100～150gを毎日1g、ついで隔日又は週3回とし、その後は INH と PAS のみで4～5年つづけた例が多い。期間の長いものでは10年位継続したものもある。しかし、化学療法の程度と治癒率の間に深い関係は見られなかつた。

治癒したものは19例で、その半数は5年以内に治癒している。改善36例と不変30例は、更に長期間観察しつづ

第3表 3年以上経過を観察した36例の転帰

	3 年 以 上	
	例 数	%
治癒	11	30.5
改善	18	50.0
不変	7	19.4
悪化	0	

『第1図 治癒例 (Fig. 1 Follow-up of the cured cases)

第2図 改善例 (Fig. 2 Follow-up of the improved cases)

第3図 不変例 (Fig. 3 Follow-up of the unchanged cases)

ければ、それぞれ治癒又は改善の所見を呈してくる症例が含まれている。

したがって、全例についての治癒率、改善率を出すことは無意味である。一応、3年以上の症例についてまとめてみると、第3表のようで、前立腺結核が、長い経過をもつて、改善乃至治癒の傾向をとることが看取される。

治癒乃至改善の経過は一樣ではない。化学療法中、前立腺の新たな部位に病変の発生することがあるのは Lattimer¹⁾ などに指摘され、化学療法が効果の少ない証拠とされるが、われわれの例でも2、3にこれがみられる。不変例では、こうした病変部の動きは少ない。

第1～3図は、治癒、改善、不変例の中から前立腺の触診所見の経過を例示したものである。

まとめ

前立腺結核は、古来、成書にも治癒し難いものとしてある。化学療法が普及してからも、その効果の少ないことは定説となっており、吾国でも、乾酪化の傾向がつよく効果が期待できないとか³⁾⁴⁾、治癒することなく進行性で限局化せず、空洞化し、手術によらなければ速かな治癒は望み難い⁵⁾といわれ、極めて悲観的である。化学療法では、前立腺への局所注射¹⁰⁾以外、効果ありとの報

告は見られない。しかし、われわれの経験例では、悪化例は1例で、これは化学療法中に病巣の一部が空洞化したものである。3年以上の観察例36例では治癒11例、改善18例、不変7例で、悪化例はない。また 往年の報告に見られるように前立腺結核を原発巣として他の臓器に重篤な結核性病変を惹起したのもなく、いずれも日常生活に支障を来していないのである。したがって、前立腺結核に対する化学療法は、著しい効果はないとしても、悪化や病巣の続発は防止し得て自然治癒の傾向を助長し、長年月の間には病変の好転乃至治癒を期待できると考えてよい。

むすび

前立腺結核に化学療法を施行し、1年間乃至15年間観察した95例の触診所見から、前立腺結核の経過について述べた。これらの症例中、悪化したのは1例に過ぎず、3年以上観察した36例では、治癒30.5%、改善50%、不変19.4%で悪化例はなかつた。この成績は、化学療法に自然治癒の加わつたものと解釈されるが、従来の説の如く前立腺結核は治癒を望み難いという考えは改められなければならない。

本稿の要旨は、昭和41年10月2日、日本泌尿器科学会

第31回東部連合地方会において、パネルディスカッションの中で発表した。

終りにあたり、御指導御校閲をいただいた土屋文雄部長に感謝致します。

文 献

- 1) Lattimer, J.K., Stearn, W.H., Anderson, J.B., Schwarz, J., Goodman, R., and East, W.: J. Urol., 60, 974, 1948.
- 2) Lattimer, J.K., Hertzberg, A., Harper, J. Berman, M., Bradley, D., and Veenema, R.: J. Urol., 67, 750, 1952.
- 3) 向山敏幸：日泌尿会誌, 45, 311, 1954.
- 4) 堀内誠三：日泌尿会誌, 47, 165, 1956.
- 5) 石山勝蔵：岐阜医大紀要, 6, 522, 544, 1958.
- 6) 市川篤二, 木村浩三郎：日泌尿会誌, 36, 165, 1944.
- 7) Scordio, P.L., Kelley, R.A., and Scott, W.W.: J. Urol., 63, 698, 1950.
- 8) 近藤厚：日本泌尿器科全書, 4巻, 303頁, 1959. 金原出版・南江堂.
- 9) 楠隆光：臨床外科, 6, 247, 1951.
- 10) 谷津民夫：長崎医学会誌, 30, 411, 1955.

(昭和42年1月5日受付)